

# 嶋満神社便り

平成二十八年 一月号 (第十八号)

発行 嶋満神社奉賛会

皆様あけましておめでとうございます。

今年最初の「便り」は昨年お届けした「八幡さんとは」の取材の中で得たトリビアなお話からです。

## 応神天皇を巡るエピソード

第十六号で見てきたように、古事記では当社の祭神である応神天皇（ホムタワケノミコト）はツヌガのイササワケ（氣比大神）とその名前を交換しますが、このツヌガが敦賀の語源となつていません。ではなぜツヌガと言つたのか、それはこの地に漂着した（住んでいた？）という「ツヌガアラシト」という朝鮮の王子の名から来ています。

「ツノがある人」でツヌガアラシト：実際に角が生えていたわけではなく、朝鮮風のトンガリ帽でもかぶっていたのでしょうか。彼は三年間、垂仁天皇（一世紀？）に仕えて朝鮮へ帰り、その国の名を「任那：ミマナ」と改めています。六世紀まで半島にあった日本の統治機関「任那日本府」です。

つまりこの「ツヌガアラシト」という人は日本の朝鮮半島経営に深く関わった人ではないか、あるいは人質だったのでは、と言う人もいます。

さて敦賀市では一九九八年、このツヌガアラシトをモデルに「ツヌガ君」という「ゆるキャラ」を作っちゃいました！



(ツヌガ君)

彼は永遠の六歳児、好物はこんぶ、かまぼこ、ソースかつ丼（ホンマに六歳児かいな？）。

ともかく五世紀頃から日本と朝鮮半島との交流が盛んになったことは確かで、それまでの九州南部を通じた中国との交流による国造りから、朝

鮮半島経由による新しい国造りに転換していったことがうかがえます。

それは応神が主導したものであり、彼の新しい国造りへの功績は大きいものであります。同時にその交易路を守護した宗像三女神（むなかたさんじよしん）、八幡さんはその地位を大きく向上させていったのです。

## 放生会 むかし、いま

放生会（ほうじょうえ）とは魚や鳥獣を川や野に放ち、生き物を大切にする祭：宗教儀式です。当社でも江戸時代の例祭日には行われていたという記録があります。

さてこの放生会、仏教でも殺生を戒めるために全国で行われますが、その元祖はなんと八幡さんの総本宮、宇佐神宮なのです。

養老四年（七二〇）、南九州で隼人の反乱が起こります。この乱の鎮圧後、犠牲者の霊を慰めるために八幡神は放生会をすべしとの託宣を下したということです。

石清水八幡宮でも千年以上、勅祭として毎年行われ、京都の年中行事の一つでしたが、明治期の神仏分離により縮小されました。しかし現在は「石清水祭」と名を変え、天皇よりのお使い（勅使）をお迎えして厳か、かつ盛大に執り行われています。

一方、宮崎宮では博多三大祭りの一つとして賑やかに行なわれています。ちなみに博多では「ほうじょうや」と言います。



(宮崎宮の放生会の賑わい)

小浜市の八幡神社では「ほうぜまつり」として山車や神楽舞も出て、若狭路最大の秋祭りとして千年の伝統を受け継いでいます。

このように見てくると、八幡さんから始まったことがいろんな形で現代に受け継がれ、息づいていることがよくわかり、面白いですね。

そのようなことを思いながら、月に一度は浮島の八幡さんへ是非お参りください。